# 言述概念の多層化

## ----リクール一般解釈学の形成過程

巻田 悦郎

七〇年代に展開されたP・リクールの一般解釈学はいかにして形成されたのであろうか。本稿はこの問いに対して答えようとするささやかな試みである。

一九六〇年代末に起きたリクール解釈学の変貌については、それをテーマとする、あるいは、テーマとしなくともなんらかの仕方でその過程を記述した研究文献が、既に複数存在する。例えば、P・L・ブルジョアは六〇年代から七〇年代初頭にかけてのリクール解釈学の展開を三期に分けて辿っている。第一期は象徴の解釈学、第二期は多義性と言語の理論、第三期はテキストの解釈である[1]。

しかし、ブルショアの論文を含めた先行文献は、少数のリクール文献に基づいて幾つかの共時的断面を記述しているに過ぎない。この結果、断面と断面がいかに繋がっているか、個々の契機がいかに変容していったかは不明のままである。本稿は、先行研究に支えられながらも、こうした欠陥を補うことを目指す。

まず、ブルジョアの三分法に従って第二期と第三期を粗描し、次に、第一期と第二期の間に起きた過程を辿る。この過程はパロール概念、解釈概念、指示概念の三つのテーマに分けて記述できると考えられるが、本稿では焦点をパロール概念に絞ることにする。

### I　多義性の理論とテキストの解釈学

ブルジョアの言う第二期は六〇年代後半に、第三期は七〇年代初頭に相当する。本節の論述はこの区分を踏襲するものであるが、叙述そのものはブルショアが参照していないリクールの文献も考慮に入れて、独自に行う。

#### イ　多義性の理論

六〇年代のフランスに於ける構造主義の台頭は、反省哲学（主体の哲学）の立場に立つリクールに、それとの対決を強いた(73a:92-3)。だが、彼は構造主義と直接対決するのではなく、それが由来した構造言語学の諸前提を解明するという迂路をとった(67a:801)。構造言語学の最も基本的な前提はラングとパロールの区別である。ラングは制度としての言

語、閉じた記号体系であり、パロールはラングの使用、個別的な遂行である。構造言語学は言語からラングを対象として抽象することにより科学として自立したが、しかし、それによって同時に、個人的で自由な産出としての言語、自己表現と意思疎通、現実指示の場としての言語を見失った(67a:806-7)。

リクールはこれに対し、記号論と意味論の区別を導入してパロールの復権を計ると共に、パロールとラングの区別そのものを語と多義性によって媒介しようとした。

言語は記号と文という二つの単位から構成されている。記号はラングの単位、文はパロールの単位で、前者は記号論に、後者は意味論に属す(67a:808,817; 69c:248)。記号論は記号を他の記号と対立させ、意味論は事物に関係づける(69c:248)。構造言語学の誤りは、言語の単位を記号（音韻論的、語彙論的、統辞論的）に限定して意味論を排除したことにあった。文は記号には還元できない独自な単位なのである。

語は示差的価値、つまり、記号、としてはラングに属す。辞書の中の語がそれある。しかし、それは誰かによって使用される時辞書を抜け出て、出来事である文の中に入り、何かを命名するようになる(67a:817)。文は出来事であり、生じては直ぐに消えてしまうが、語は新しい使用価値を担ってラングに保存され、別の機会に再び用いられる(67a:817, 68a:342-3)。ラングからパロールへの移行では語は発話行為に構造を与えたが、ここでは構造に偶然性と不均衡、歴史と伝統を与える(67a:817, 68a:343)。語は構造と出来事の交流点なのである(67a:820)。

語の多義性は、共時的には、一つの語が同時に複数の意味を有することである。しかし、この共時的な定義は、それだけでは一面的である。というのも、多義性は、語の使用の歴史を共示面に投影したものだからである(67a:817-8)。これが可能なのは、語が古い意味を失わずに、新しい意味を獲得できるからである。だが、この意味の拡張は体系（辞書）における語の相互限定により抑制されている(67a:818, 66a:64)。

ロ　一般解釈学

一般解釈学は言述過程論と解釈過程論とから構成されている。前者は言述が話し手から読者に伝承される過程を、後者は解釈の諸段階を扱っている。

言述(discours)は誰かによって誰かに向けて何事かについて述べられる言語である。話し手が言語能力（ラング）を行使して発話する時、言述は一過的な出来事として生じる[2]。しかし、発話が他者に伝達され理解される際、その意味内容は保存される[3]。ここで出来事は意味に乗り越えられるのである。

言述が後の時代の読者に伝承される場合、意味はエクリチュール（文字言語）に媒介される。言述はテキストとして、それが産出された状況を越え、新しい時代の読者に受容される。ここで意味は読みの出来事に乗り越えられる。この出来事は最初の出来事の反復ではなく、意味から出発する新しい出来事である(71e:22, 71f:183,184)。

文字への書込みは言述に既に生じている、出来事の意味への超出（志向的外在化）を引継ぐものである。しかし、エクリチュールは単なるパロール（音声言語）の固定ではない。言述は文字に記されることによって、著者の意図、本来の読者（原読者）、テキストが産出された状況（原状況）から自律する（意味論的自律）。テキストの受け手は文字を読みうる人すべてであり、この可能的読者がテキストにおいて了解すべきはテキストの背後の著者の心的生や原状況ではなく、テキストの前に開かれた可能的、精神的世界である[4]。

テキストの解釈は、テキストの意味の直観的・全体的な把握（推測）である素朴な了解から始まる。しかし、テキストは意味として、エクリチュールとして外在化され、また作品として構造化されているので、了解はテキストの外在的構造の説明を経由せざるをえない(71d:545-6, 71e:29, 71f:186-7)。ここで素朴な了解は構造分析に乗り越えられる。構造分析はテキストに内在的な形式的関係、メッセージを生み出すコード、の分析である。だが、テキストは言述の一形態であって、常に何ものか（指示）について語っている。テキストを閉体系として扱う構造分析もこれを否定することはできず、テキスト世界の同化である批判的了解に乗り越えられる。ここで読者の状況と存在様式は想像的に変容される[5]。

## II　二理論の間

前節で記述された二つの理論はいかなる仕方で結びついているのであろうか。多義性の理論から一般解釈学への変容の過程を、連続性に注意を払いながらも、更に二つの時期に分けて考察することにしよう。

### イ　ラング／パロール

ラング／パロールの構成主義的区別は主体の否定を含意しているゆえに、リクールにとって常に問題をはらむ区別であった。しかし、この二分法に対する彼の対処の仕方は年によって微妙に異なっている。

一九六五～六年の講義「言語の諸問題」(66c)では、ラングはその存在は否定されていな

いものの、パロールの抽象とされ(66b:97, 66c:29,33)、パロールの方に重心が置かれている。ここではパロール概念はラングを包括するほど豊かな意味内容を持たされているのである。六七年「構造、語、出来事」(67a)では、語と多義性がラングとパロールの対立の媒介項として現れる。この点についてはⅠイで述べた通りである。語は「言語の諸問題」では、意味単位の同定の問題に関連して現れるだけだった(66c:38)。多義性は同論文で意味論の中心問題とされるが(66c:39)、ラング/パロールの対立を媒介する現象ではまだなく、共時的定義が通時的定義に対して優位に置かれている(66c:41)。同年の「二義性の問題」(66a:63)でもこの優位は同様であり、また、多義性は象徴的言語の問題の延長上に置かれている。

一九六六年、リクールはバンベニストと共にジュネーブでのフランス語圏哲学会に参加し、また、同年にバンベニストの論文集『一般言語学の諸問題』が公刊される[6]。彼の影響で記号論/意味論の区別をリクールが導入するのは、六七年である。六五年の「実存と解釈学」(65a)では意味論は様々な象徴の列挙と分類のことに過ぎず、六六年の「言語の諸問題」では記号論ではなく音韻論と対立する概念、同年の「二義性の問題」では語彙論的意味論とグレマス流の構造意味論を包括する概念であった。こうした目まぐるしい変化はこの時期リクールが急速な勢いで言語学を吸収・同化していることを示している。 六八年の「言語についての反省が言葉の神学に対しもたらす寄与」(68a)では語や多義性の地位は前年とほとんど変わっていない。注目すべきは、言語研究として、ラングを特権化する構造言語学とパロールを重視するパロールの現象学の外に、ハイデガー流の言語の存在論が挙げられていることである。また、リクールは六七、八年に「エーベリンク」、(67d)「R・ブルトマンにおける神話と宣教」(67c)、「エーベリンクにおける言葉の出来事」(68b)といった一連の神学関係の論文を発表している。「寄与」論文は自己の多義性の理論をエーベリンクらの言葉の神学に関係づけようとする試みであると言える。

意味論/記号論の区別がその後ずっと保持されたのに対し、語と多義性は六九年になるとその中心性を失い、僅かに七〇年代の隠喩論の補足的契機として生き延びるに過ぎない。同時に、ラングとパロールの対立そのものの克服という課題は放棄されてしまい、その後は、むしろ、言述概念を多層化することによって、間接的にこの二分法の克服が目指される。

ロ　エクリチュールと意味

「構造、語、出来事」の第二節の表題「言述としてのパロール」が示唆しているように、

言述概念は当初パロール概念と同義であった。事実、リクールはこの二つの概念を自由に言い換えている。時に、両者が別であるかのような表現が用いられないわけではない。パロールが単に口を動かして話す行為というニュアンスを持っているのに対し、言述は何か（指示）について何か（意味）を「述べる(dire)」[7]という積極的な意味を持っているのからであろう。しかし、この二つの概念は六八年までは「同じもの」の異なる相を表していた、と言った方が適切であろう。

ところが、六九年になるとエクリチュールという概念が積極的な概念として現れ、言述概念はパロールとエクリチュールを包摂するものとしてその意味を拡張される。パロールとエクリチュールは言述の二つの実現形式なのである(71c:289)。同時に「パロール」はエクリチュールと対比されることによって、音声言語という意味を前面に打ち出すようになる。確かに、エクリチュール概念はそれ以前から用いられてきた。だが、例えば、語はエクリチュールの単位である(66c:38)、という仕方で付随的に用いられていたに過ぎない。フロイト論ではテキストはエクリチュールには限定されないと言われている(65b:35)。エクリチュールは全く消極的な概念なのである。神学関係の論文でそれは聖書や世俗的文献を意味するものとして頻繁に現れるが、しかし、パロールとの相違はほとんど問題ではなく、両者の対比が問題の時にでも、パロールの疎外態として否定的にのみ言及される(68b:30, 68c:54)。

この変化は一九六七年にＪ・デリダの『グラマトロジーについて』、『声と現象』、『エクリチュールと差異』の三つの著作が発刊され[8]、広範な影響を及ぼし始めたことと無関係ではない。リクールは一九七〇年の「解釈の諸問題」(70a)、「テキストとは何か」(70b)で、＜書く－読む＞の関係は＜話す－聞く＞の関係の特殊事例ではなく、著者が書く時読者は不在であり、読者は読む時著者は不在である、と述べている(70a:169, 70b:182)。後者では表音文字の偏愛は、エクリチュールは単にパロールの固定であるという信念を生んだが、エクリチュールはパロールを介さずに直接実現されうるのだから、パロールと並ぶ言述の実現形式であると主張されている(70b:182,183)。彼はデリダと違い、エクリチュールをあくまで言述の一形式とみていたが、作家の死、エクリチュールの起源、表音文字の偏愛といった観念は彼の影響なしには考えられない。

しかし、パロールに対してエクリチュールが持つ様々な積極的意味については、リクールはデリダよりも、ガダマーの影響を受けている。デリダは言わば刺激に過ぎなかったが、ガダマーの影響は内容的で、更には根本的でさえあった。ガダマーの主著『真理と方法』

は一九六〇年に発刊され、六五年にはその第二版が出る[9]。六六年には既に、リクールの論文にガダマーの名が現れるが(66c:28)、最初の実質的な言及は六九年の「哲学と言語」である。そこでは、エクリチュールは解釈学の優れた対象である、というガダマーの主張が肯定的に述べられている(69a:290)。また、既に言及した「テキストとは何か」はガダマー七〇歳記念論文集『解釈学と弁証法』への寄稿論文である。六八年か、六九年にリクールは『真理と方法』を読んだと見られる。

『真理と方法』第三部第一章a節「解釈学的対象の規定としての言語性」には、リクールがガダマーから受け取ったと思われる多くの洞察、表現を見つけることができる。「文字によって固定されたもの」(GWI:396,399)というテキストの定義、書記性が音声言語への単なる偶然的ではないこと(GWI: 367)、エクリチュールはその物質性にもかかわらず精神性を有すること(GWI:368-9)、テキストの意味は著者の意図や原読者から分離すること(GWI:395-6,398,399)、テキストの了解は過去の著者の生への遡及ではなく、テキストそのものの意味への参与であること(GWI:395)、テキストは原読者に限定されず、文字を読みうるものすべてに開かれていること(GWI:396)などである。

一九七一年に発表された「テキスト・モデル」、「出来事と意味」、「言述における出来事と意味」の三論文、それから七一年から七二年にかけてのルーバン大学講義『解釈学について』はテキストの意味論的自律や了解の対象について、ガダマー解釈学の深い刻印を見せている。

七一年の諸論考は七〇年の「解釈の諸問題」、「テキストとは何か」に対して、別の側面でも進展を示している。パロールのエクリチュールへの移行が出来事から意味への移行によって媒介されたのである。志向的外在化は物質的外在化を準備しているのであり、エクリチュールはパロールに既に始まっている過程をより十全に発現させる。実は、七〇年の二論文でも、文字に書き込まれるのは言述の意味だとされているのだが(70a:169, 70b:182)、その意味概念は未規定で、出来事との関連も明らかではない。出来事と意味の弁証法の出現に伴い、エクリチュールとパロールの対比は七〇年の段階よりも弱められる。

文字に記されるのは意味であるという考えは、やはりガダマーに由来する。彼は「書字記号の中に実際に保存されたのは、ただ、反復において同一なものだけである」(GWI 396)と述べている。これに対し、出来事と意味の弁証法の由来は極めて多様である。リクール自身は意味の規定に際してヘーゲル、フッサール(ノエシスとノエマ)、フレーゲ(表象と意味)を持ち出しているが、歴史を意味の場、出来事の帰結が展開される場と捉える(7

1e:26)歴史の神学も一つの動機となっていると考えられる。実際、六九年の「ブルトマン――神話論なき神学」では彼はバネンベルクやモルトマンの摂取について語っており(69b:36)、七一年に「歴史の神学」をテーマとして行われた会議で報告された「意味と出来事」では、以前に肯定的であった言葉の神学に対し、すっかり批判的になっている(71e:25)。歴史の神学では、宣教の出来事は、言葉の神学におけるようにキリストの出来事と同一化されるのではなく、出来事には還元できない歴史(ないし意味)によって隔てられ、媒介される[18]。

以上、我々は大変概略的にではあるが、リクールの七〇年代解釈学の成立過程をパロール概念について辿ってきた。それを一言で言えば、言述概念の多層化ということになろう。しかし、影響関係についてまだ未解明の部分があり、また、この成立過程を解釈概念や指示概念からも考察する課題が残っている。

〈略号表〉


GWI Gesammelte Werke I(Hermeneutik I :Wahrheit und Methode), Tübingen, J.C.B. Mohr, 1986.

65a 'Existence et herméneutique'Interpretation der Welt,hrsg.von H.Kuhn et al., Würzburg, Im Echter-Verlag, 1965; S.32-51. (これは一九六四年のモントリオール哲学会での講演を修正したもの)

b De l'interprétation:Essai sur Freud, Paris, Seuil, 1965.

66a 'Le problème du 'double'-sens comme problème herméneutique et comme problème sémantique' Cahiers internationaux de symbolisme 12(1966):59-71.

b 'La philosophie à l'âge des sciences humaines' Cahiers de philosophie 1 (1966):93-99.

c 'Les problèmes du langage' Cahiers de philosophie 1(1966):27-41. (一九六五~六年ナンテール講義)

67a 'La structure, le mot, lévénement' Esprit 35(1967):801-821.

b 'New Developments in Phenomenology in France :The Phenomenology of Langua-

ge' Social Research 34(1967):1-30.

c 'Mythe et proclamation chez R.Bultmann' Les Cahiers du Centre Protestant de l'Ouest 8(1966):21-33. (一九六六年に西部プロテスタントセンターで行われた講演の録音テープから起こしたテキスト)

d 'Ebeling' Foi-Education 78(1967):36-57.

68a 'Contribution d'une réflexion sur le langage à une théologie de la parole' Revue de théologie et de philosophie 18(1968):333-348.

b 'L'événement de la parole chez Ebeling' Cahiers du Centre Protestant de l'Ouest 9(1968):23-31.

c 'Sens et langage' Cahiers d'Études du Centre Protestant de Recherche et de Rencontre du Nord 26(1968):38-75. (一九六七年にアミアンで「キリスト教共同体の意味と役割」をテーマとして行われた神学会議での講演。録音テープから起こされたもの)

69a 'Philosophie et langage' Contemporary Philosophy :A Survey, vol.3, ed.by R.Klibansky, Firenze, La nuova Italia Editrice, 1969; pp.272-295.

b 'Bultmann :Une théologie sans mythologie' Cahiers d'Orgemont 72(1969): 21-37. (一九六八年にヴィルメトリで行われた講演)

c 'La question du sujet :Le défi de la sémiologie' Le conflit des interprétations :Essais d'herméneutique, Paris, Seuil, 1969; pp.233-262. (67bのフランス版であるが、少し異なる)

70a 'Problèmes actuels de L'interprétation' Centre Protestant d'Étude et Documentation 148(1970):163-182. (一九七〇年、ヴィルメトリで行われた講演。録音テープから起こされた)

b 'Qu'est-ce qu'un texte :Expliquer et comprendre' Hermeneutik und Dialektik hrsg.von R.Bubner et al., Tübingen, Mohr, 1970; S.181-200.

c 'Hope and Structure of Philosophical Systems' Proceedings of the American Catholic Association, ed.by G.F. McLean and F.Dougherty, Washington, The Catholic University of America Pr., 1970; pp.55-69. (サンフランシスコで一九七〇年に、「哲学とキリスト教神学」のテーマで開かれたアメリカカトリック協会大会での講演)

71a 'Du conflit à la convergence des méthodes en exégèse biblique' Exégèse et herméneutique, d.par X.Léon-Dufour, Paris, 1971; pp.35-53.（一九六九年、シャンティリで開催されたフランスカトリック聖書研究協会の会議の開会講演。但し、七一年に公刊されるにあたって、かなり書き直されたと推測される。）

b 'Sur exégèse de Genèse 1,1-2,4a' op.cit. pp.67-84.（同会議の報告）

c 'Esquisse de conclusion' op.cit. pp.285-295.（同会議の総括）

d 'The Model of the Text :Meaningful Action Considered as a Text' Social Research 38(1971):529-562.（一九七一年、New School of Social Reseachで行われたガダマーに関する会議での講演）

e Événement et sens' Révélation et histoire :La théologie de l'histoire, Paris, Aubier, 1971; pp.15-34.（一九七一年ローマで「啓示と歴史」をテーマとして開かれた国際会議での報告）

f Événement et sens dans le discours' Paul Ricoeur ou la liberté selon l'espérance éd.par M.Philibert, Paris, Seghers, 1971; pp.177-187.

g Cours sur L'herméneutique, Louvain, Institut Supérieur de Philosophie,1971-2.（一九七一～二年ルーバン大学講義[11]）

73a 'A Philosophical Journey :From Existentialism to the Philosophy of Language' Philosophy Today 17(1973):88-96.（これは一九七一年にシカゴ大学神学部で行われた講演で、最初 Criterion誌に掲載された）

注

[1] Patrick L. Bourgeois 'From Hermeneutics to the Interpretation of Texts' Studies in the Philosophy of Paul Ricoeur, ed.by Charles E. Reagan, Athens, Ohio U.P., 1979; pp.83-96. これ以外には、リクール解釈学の変容そのものをテーマとしたものではないが、例えば、久米博「解釈学の言語学的基礎づけ――バンヴェニストとリクール」『象徴の解釈学――リクール哲学の構成と展開』、新曜社、一九七八年、pp.156-177.「ディスクールと解釈」『（同）』 pp.178-199.「テキスト解釈と構造分析」『（同）』 pp.200-223. Thodoor M. Van Leeuwen, The Surplus of Meaning :Ontology and Eschatology in the Philosophy of Paul Ricoeur, Amsterdam, Rodopi, 1981; pp.71-73.

[2] 71d:530,531; 71e:17; 71f:178,179; 71g:14.

[3] 71e:17-8; 71f:179; 71g:15-6,33-4.

[4] エクリチュールがパロールに対して持つ固有性については、71a:48-9, 71d:531-37, 71e:18-22, 71f:180-3; 71g:24-32.

[5] 解釈過程については、71a:49-53, 71d:545-59, 71f:186-7, 71g:121f.

[6] Emile Benveniste Problèmes de linguistique générale, Paris, Gallimard, 1966.

[7] 67a:806; 68a:341,342; 69c:247.

[8] Jacques Derrida De la grammatologie, Paris, Minuit; L'écriture et différence, Paris, Seuil; La voix et phénomène, Paris,P.U.F.. デリダの思想については、次の二つが参考になった。Richard Harland Superstructuralism, London/New York, Methuen, 1987;pp.125-154. V. デコンブ『知の最前線----現代フランスの思想』、高橋允昭訳、TBSブリタニカ、一九八二年、pp.197-243。

[9] Hans-Georg Gadamer Wahrheit und Methode :Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik; Tübingen; J.C.B.Mohr; 1960, 65.

[10] J. モルトマン『希望の神学----キリスト教的終末論の基礎づけと帰結の研究』<現代神学双書：35>、高尾利数訳、新教出版社、一九六八年。Wolfhart Pannenberg ,Kerygma und Geschichte' Grundfragen systhematischer Theologie: Gesammelte Aufsätze, Göttingen, Vandenhoeck und Ruprecht,1979³; S.79-90. ,Hermeneutik und Universalgeschichte' Zeitschrift für Theologie und Kirche 60 (1963): 90-121. なお、モルトマンとパネンベルクの思想については、近藤勝彦「W. パネンベルクとJ. モルトマンにおける啓示と歴史」[『現代神学との対話』、ヨルダン社、一九八五年、pp.95-147] が参考になった。

[11] リクールは一九六六年パリ大学ナンテール分校開校と共にソルボンヌからナンテールに移っていたが、一九七〇年三月、大学への機動隊の導入を許したことの責任をとり、パリ大学教授・文学部長を辞職し、ルーバン大学に移っている。辞職までの経緯については、久重忠夫「フランスの大学における一大学人――ポール・リクールの場合」『専修人文論集』第十五巻（一九七五年六月）pp.71-94.を参照のこと。